

## クライの諸形式の整理

——「暫定抽出」の副助詞、名詞化辞、助動詞——

星野 佳之

はじめに

副助詞クライ<sup>(注1)</sup>については、従来「とりたて用法」と「程度用法」とを区別して、その関連性を問う研究があり<sup>(注2)</sup>、またその意義が「最低限」「例示」「最低限の例示」「低評価」「軽視」などと記述されてきた<sup>(注3)</sup>。本稿では、まず副助詞の「最低限の例示」用法について、森山卓郎(一九九八)の副助詞デモに関する「暫定抽出」を踏まえて再考し、「最低限の暫定抽出」と理解すべきことを主張する。そして「最低限の暫定抽出のクライ」が、主にコトガラの存在を抑制的に捉えるか積極的に捉えるかで二者に分かれていることを述べる。その上で、いわゆる「程度」のクライも、「暫定抽出」の観点から把握されることを述べる。

### 一 最低限の暫定抽出 (一)

1 皿ぐらい洗え。 最低限の例示

2 スイカぐらいの大きさ。 程度

副助詞クライについて、「最低限の例示」と考えることは、基本

的には異論がない。「皿ぐらい洗え。」の場合、本来すべきこと④一切を取り仕切る、③料理を作る、②買い出しに行く…のうち、最も程度の低い(この場合は困難度において)①「皿を洗う」が、より上位の②④から切り離された上でとりあげられている(最低限)。

3 料理は作らないまでも、せめて皿ぐらい洗ったらどうだ。は、クライの①と②④を分離する発想が顕著に出たものだ。

しかし、「例示」の部分については、同じく「例示」を表すと言われるデモについての森山卓郎(一九九八)を踏まえて更に考察を進める必要があると考える。森山は、「など／か何か」と比較した上で、デモに「暫定抽出」の用法を指摘し、これをもとに、「過去の確定的な文末と共起しない」というデモの制約の所以を説明した。実はこの制約はクライも共有するものであり、「暫定抽出」は、クライの理解にも有効であると考ええる。

森山論文の論旨を、本稿に関係する限りで挙げる。

①「か何か」と「でも」の例示は、それぞれ区別されるべきである。眠気覚ましにコーヒーか何か飲みなさい。紅茶でよかったら

ここにあるけど。

\*眠気覚ましにコーヒーでも飲みなさい。紅茶でよかったらここに  
あるけど。

コーヒーか何か飲みなさい。コーヒーが一番いいけど。  
?コーヒーでも飲みなさい。コーヒーが一番いいけど。

の可否が示す通り、「か何か」では、当該例以外の別の要素も併せて並列的に例示されている(一例並列提示)が、「でも」では例示されているものだけが取り上げられている(暫定抽出)。「暫定抽出」は、「ほかのものでもよいが思いつきとしてはまずは当該要素が提示される」、「いわば知識をコントロールする段階での扱い」。

② 暫定抽出の考え方はデモの文末制約をうまく説明する。「確定的事態の報告をする場合に、すべての要素をつくすのではなく、一要素を例示するということはありうるが、それを偶然の思いつきとしていうことはできない」から確定的過去と共起しない。文末が確定的過去でありながらデモと共起する例外は、事態選択形式や反実仮想など、そもそも一つの確定的な事態ではないので共起できるのだ。

\*コーヒーでも飲んだ。

コーヒーでも飲むべきだった。

コーヒーでも飲んでいればそれで幸せだった。

コーヒーでも飲んでるようだった。

せっかく沼津にきたのだからウナギでもたべたかったなあ。

一つの確定的過去

事態選択形式

条件文内部

不確定

反実仮想

(天井裏の音を訝しむ人に) ネズミでも走ったのだよ。

本でも読んでおいたか。 ノダ構造…状況の解釈としての用法  
疑問文

③ 「でも」(「か何か」も)の例示は否定と共起しない。取り上げるものが当該要素以外のものであってもよいという意味関係を構成するために、否定文においてどのような事態を否定するかわからなくなるから。

\*コーヒーでも飲むなよ。

以上のデモの特徴は、クライもおおかた共有すると思われる。

まず、クライの例示も暫定抽出であろう(①)。

? コーヒーぐらい飲みなさい。紅茶でよかったらここにあるけど。

? コーヒーぐらい飲みなさい。コーヒーが一番いいけど。

そしてクライも確定的過去と共起せず、かつデモとほぼ同様の例外を持つ(②)。以下にそれぞれの例文を掲出した(「最低限」の意味が露出しやすいよう一部改めた(注4))。

\* コーヒーぐらい飲んだ。

コーヒーぐらい飲むべきだった。

さすがにコーヒーぐらい(は)飲んでるようだった。

せっかく沼津にきたのだからウナギぐらいたべたかったなあ。

(猫一匹通れないと言うが) ネズミぐらい(は) いたのだな。

一つの確定的過去

事態選択形式

不確定

反実仮想

ノダ構造…状況の解釈としての用法

マニユアルぐらい(は)読んでおいたか。疑問文

更にクライは否定と共起しない(③)。

\*コーヒーぐらい飲むよ。

このようにクライは、基本的な特徴をデモと共有するのであって、これにクライ特有の例示の内容を加味していえば、「最低限の暫定抽出」とでも理解すべきものである。

しかしこれで全てが説明できるわけではない。次のような例は、更にクライの独自性を探るべきことを示唆する。

4 とりあえず時間でもつぶそう。

\*とりあえず時間ぐらいつぶそう。

5 じゃあここで新聞でも読んでるわ。

\*じゃあここで新聞ぐらい読んでるわ。

「とりあえず」といった文脈で(暫定抽出)、「時間をつぶす」などの最低限の行為を取り出しただけでは、クライの文として成立しない場合があるのだ。これは何に因るのであるうか。

実はクライには、文末のほかにも制限がある。

6 私にも自分の意見ぐらいあります。

というとき、自分の意見(があること)について、(敢えて)低めに言っているということは認めて良いだろう。しかし例えば、「最低限のものを持つている」と言ったコトを、謙遜として次のようにいうことは普通ではない。

7 \*小屋(実ハ別荘ノコト)ぐらい持ってます。

同じように敢えて低めに言う用例でありながら、6は可能で7は不可である。これは両者の文脈の違いによると考えられる。

8 私にも自分の意見ぐらいあります。

9 飲み物ぐらい出るよ。

10 寝る場所ぐらいはあります。

これらがよく馴染むのは、反駁のような状況に於いてではないだろうか。そこで問答を含んで用例を作ってみれば、次のようになる。×を付した文への応答としては不自然で、逆に○を付した文への反駁としては自然なはずだ。

11 ×是非ご意見を聞きたいのですが。

○どうせ考えたこともないくせに。

↓ 私にも自分の意見ぐらいあります。

12 ×フルコースが出るかな。

○きつと何も出さないだろう。

↓ 飲み物ぐらい出るよ。

13 ×豪邸を持っているんだって？

○行く宛もないくせに。

↓ 寝る場所ぐらいはあります。

つまり、「ゼロでは？」という前提に対して、「最低限はあるのだ」と返す時にクライが用いられるのである。先の不適格な7も、この反駁の文脈が想定しにくい故に違和感があるのであり、「いえいえ、ただまあ、小屋ぐらいは持ってますが…。」という具合に一度ゼロを経るといふ過程を経れば、謙遜として用いられ得るだろう。

もちろんクライが反駁専用の形式であるというのではない。次のような例もある。

1 皿ぐらい洗え。

14 コーヒーぐらい飲むよ。

15 挨拶ぐらいしなさい。

しかしこれらも、放っておいたら起こるべきコトが何も実現しないゼロの出現が予想されるような状況、が前提であることは認めてよいただろう。反駁の例も含めてこの前提のもと、出来すべき、または認識されるべき最低限のコトガラを差し出すのがクライなのである。「皿ぐらい洗え」というのは何もしようとしない人への言葉であって、全てやるうとする人に「最低限のことだけをして出しゃばるな」と言うのではない。先の4・5が不適格なもの、ゼロになりかねないという状況が考えにくいという事情によるのである。

また、次の例は一つの確定的過去と考えられるものでありながら成立するが、

16 私だつて研修ぐらい行きましたよ。

これとて「ろくな訓練も受けていないくせに」という非難への反論であるか、「研修という入り口の仕事さえ行うことをせずに文句を言う人」に対して促すためのセリフ、なのであって、同様に説明が可能である。

ここまでのところをまとめてこれを「クライA」とし、「最低限の例示」という理解を更に一歩進め、次の通りに捉え直すべきだと考えるのである。

ゼロの状況が実現しかねない状況において、実現すべき最低限のコトガラを積極的に暫定抽出する

## 二 最低限の暫定抽出 (二)

以上のように考えると、他にも幾つかあると思われるクライの諸

形式のうち、次のようなものは同様に理解することが可能となる。

17 耳をすませば、わずかに聞こえるものは、大空にさらさらとふれ合う雪の音ぐらいである。【貝鍋の歌・中谷宇吉郎】

18 私にできることと言えば、せいぜいお祝いするぐらいだ。

これらは「クライだ」の形で文末に立ったもの（の一部）で、時として「限定」と解釈できそうなものである。ただ、17などは「雪の音だけだ」と置き換えても大差ないのだが、次の19の示すように、常にクライとダケ・シカを言い換えられるわけではない。

19 残るは「お前だけだ。／お前しかない」。

\* 残るはお前ぐらいだ。

これはこのクライ（だ）が「限定」そのものを表している訳ではないことを示すものと思われる。

この「限定的」な表現について、丸山直子（二〇〇一）は主に前節のクライAに関して、

「風のジャッジはできる」と「風のジャッジぐらいはできる」、あるいは「ザウアークラウトしか食べない」と「ザウアークラウトぐらいしか食べない」を比較すると、「風のジャッジは」「ザウアークラウトしか」と限定してしまわずに、「風のジャッジ」「ザウアークラウト」を例として挙げ、そのようなものとゆるやかに述べることにこそ「ぐらい」の働きがあることが見て取れる。

と説明して〈数量小（ゆるい限定）〉の用法と捉える。今問題とする17・18のクライにも全く同様に説明が可能、というよりクライAよりも寧ろこちらによくあてはまると思われる。というのも、日本語記述文法会（二〇〇九）が

「ぐらいしか」は、「ぐらい」の表す「最低限」という意味と「し

か」の限定の意味とともに表し、「当てはまるもの、挙げられるものはこれだけだ」といった限定の意味を表す。

と説明するように、クライAが限定的に働くのは「しかな」と共に働くときくらいであり、単独で「限定」となるのはここで扱うクライ(だ)の方なのである。

改めて本稿の言葉で言い直しつつ17・18に即して説明すれば、ゼロに近い状況でとりあえず思い浮かぶものを取り出している以上、そもそも候補は實際上「雪の音／お祝いする」以外に見つけにくい状況なのであり、ゆえに限定的である一方で、後ほど辛うじて別の該当物に思い至ればそれを言ってもよい余地が「暫定抽出」にはあるのであって、これが「ゆるさ」の要因となるのである。19は唯一の残留者を眼前にして言うような状況では、「暫定抽出」的発想の余地がないからこれをクライ(だ)に置き換えることはできないが、「ほとんど来場者がなかった」というような状況を思い起こしている状況でなら、

20 結局来たのはお前くらいだった。

は十分に成立する。他に一、二人はいてもよいからである。17も全体的に静謐な状況を覆さない限り、風や衣擦れの音までも排除するものではないのである。

従ってこのクライ(だ)は、「ゼロの状況が実現しかなない状況における最低限の暫定抽出」といってよい。ならばこれを前節のクライAと同じく理解するべきかもしれない。

しかし、両者にはなお注意すべき相違点がある。それは他ならぬ「出現しかなないゼロ」にまつわり、前述の単独で「限定的」になるか否かの違いにも現れている。クライAは「ゼロではない」旨

の主張であったり、「ゼロだけは避けよ」との命令であったりした。しかし17・18の如きクライ(だ)の場合は寧ろ「ゼロに極めて近い」という状況を描写するものである。反駁の文脈で自然に用いられるかどうかを対比すればその違いは明らかであろう。例えば「何も聞かえせんね」と言われて21のように言えばやはり反論的、22のようにいえば実質的な同意である。

21 風の音くらい聞かえませよ。

22 聞こえるのは雪の音くらいですな。

17の「わずかに聞こえるものは」とか、次例23の「ただ、あるといえば」とか、例外的な存在として扱おうとする態度がクライ(だ)によく馴染むのもこのためだ。

23 ただ、あるといえば藻海くらいだろが、それも過去における魔境に過ぎず……いまはその怪馬尾藻も汽船の推進器が切つてしまふ。【太平洋漏水孔】漂流記・小栗虫太郎】

このクライ(だ)は、いわばゼロに寄せて把握する性質を持つ。この点に於いて、ゼロから離れようとするクライAと反対の方向を向くのであって、意味的に分化していると言わべきである。この意味上の違いを踏まえて、17・18・20・22・23の類についてこれを「クライB」とし、次のようにまとめておこう。

最低限成立する例外的コトガラを、その存在について抑制的に暫定抽出する

その上で、ここまでのクライA・Bの文法上の違いについても考えたい。クライBの17・18では、「雪の音くらい／お祝いするくらい」

が、「聞こえるもの／＼できること」と照応して名詞相当であることは明らかである。次の24・25の如く、語であれ句であれ、クライと結合した単位は体言相当であり、かつ文脈はいずれも存在を抑制的に捉えられている。

24 来るのは太郎くらいだ。

25 (珍事と言えばせいぜい) 太郎が来たくらいだ。

一方、クライAはこのような形で名詞述語になることがない。

26 太郎くらい来るさ。

27 \*来るのは太郎くらい「さ／＼だ」。

27は26の言い換えとしては成立しない。26同様に存在を積極的に捉えるクライAのものと解釈することはできず、これは24のクライBになる他ないのである。

このようにクライBは語乃至句を体言化し、更にダと結合して名詞述語文になるのだが、これと格助詞等が結んで働く文中の体言化のクライは、区別すべきものようである。文末の名詞化クライは「最低限の暫定抽出」であって28のように「大」に対応しない。

28 \*司会の大役を仰せつかるくらいです。

一方の文中の名詞化クライは、次の29・30など、確かに24と同様の意味を表し、これだけならクライBと同質のようであるが、

29 (来るのは) 太郎くらいが、関の山だ。

30 田中選手がいくら奮闘したところで、20位以内に入るくらいが、関の山だ。(日本語記述文法会(二〇〇九))

同時に

31 この大役には横綱くらいが、ふさわしい。

32 20位以内に入るくらいが、「ちよつどいい／＼ベストだ」。

の如く、必ずしもクライBの「最低限」とは言えない例も見られる。また

33 明日ぐらいに、テストがあるんじゃないか(注5)。

34 私は四〇ぐらいから、やつともものになりだした。

35 ここから新宿駅くらいまで、ケーキの買えるところはありますか。

のようなものは、もはや量・程度と無関係の時点・地点を暫定的に取り出して、存在の捉え方にも積極・抑制的いずれの制限もないものと考えられる他ない。格助詞と結んでクライまでが体言相当であることは明白で、体言化という点はクライBと共通するにもかかわらず、なおこの文中でのクライは「クライC」とし、「単純暫定抽出」の用法と理解すべきなのではないかと考える(注6)。

文末と文中とでBとCの違いが生じる事情は不明だが、この体言化に関連しては更に、クライAについても言及せねばならない。日本語記述文法会(二〇〇九)は前掲の30の例と並べて

36 筆で字を書くくらい簡単だ。

の例を挙げ、「述語を名詞化するとりたて」として

「20位に入ること」「筆で字を書くこと」に対する、話し手の「たいたいことがない」「レベルが低い」といった評価が表されていると説明する。30が低評価の文脈で用いられているのはその通りとして、更に存在の捉え方に積極・抑制の制限を持たないクライCであるとこれを本稿が考えるのは既に述べたが、問題は一方の36は確かに「低評価」、本稿の言い方で「最低限の暫定抽出」であり、更には「存在を積極的に」捉える規制が働いていることである。

37 筆で字を書くくらい、「簡単だ／＼訳ない／＼できる／我慢しろ」。

\*筆で字を書くくらい、「困難だ／大事だ／最適だ」。

30と36の違いについて、結論から言えば30はクライC、36はクライAとして区別されるべきだと考える。36の文脈の制限はクライAのものであるし、更には文中におけるあり方も、両者に異なりがあるからである。

確かに「筆で字を書くくらい」までの部分は体言的にひとまとまりにされていよう。しかし、この部分が全文体の中でなお体言として働いているわけではないことは、36のクライに格助詞を後置できないことから明らかである。

38 \*筆で字を書くくらいが、「簡単だ／訳ない／できる／我慢しろ」。

逆にクライ・ガの形をとる32から格助詞を取り去ると不適格になる。

39 ? 20位以内に入るくらいゆ、「ちようどいい／ベストだ」。

そもそも、文末との関わり方もクライAには特色があった。「皿を洗う」というコトガラをAで表せば次の如くであるが、

40 A 皿くらい洗います。

40のクライを文末に廻した文は当然41ではなく次の42である。

41 B 皿を洗うくらいです。

42 A 皿を洗うくらいします。

クライAは述語に関わる時には「クライだ」の形ではなく、述語から形式動詞スルを分出した上でそこに介入する。これはサエ・スラなどの副助詞の同類と捉えるべき事を示すように思われるのだが、これが主題を表しているのが36であると考えるべきではないか。

日本語記述文法会(二〇〇九)は、

43 受験生はマンガなんか読んではいけません。

44 カラオケなんかつまらないよ。

について、両者に連続性を見いだしながら、前者を「とりたて助詞」とし、後者を「主題を提示する」ものと区別するが、これとパラレルに次の両者を考えればよいということである。

36 筆で字を書くくらい、簡単だ。 主題

45 筆で字を書くくらいが、関の山だ。 主格

クライゆは、既に主題がある文には用いられないことも、この理解を支持するように思う。

46 A ? 子どもはうるさいくらいゆ、我慢しろ。

B 子どもはうるさいくらいが、ちようどいい。

よって本稿は、36の類をクライAに含めた上で、これらを副助詞と理解しておく。

### 三 「程度・量」のクライについて

以上、クライをA・B・Cの三様に分類したことになるが、更に「クライD」とでも呼ぶべきものが残されている。いわゆる「程度・量」のクライである。

47 あの太郎くらい食べる。／腹がふくれるくらい食べる。

「程度・量」であるならクライDは修飾的機能を持つわけで、A・B・Cに対してかなり異質であるが、それでもなお、このクライについても、「暫定抽出」という観点は有効であるように思う。

まず森田(一九八〇)も指摘する通り、幾つかの「程度・量」の文で、ホドが使えてクライが用いられない例が存在する。

48 あれほど注意しておいたのにやっぱり間違えたか。

\*あれくらい注意しておいたのにやっぱり間違えたか。

49 わたしは先生が考えているほど、ばかな学生ではありません。

\*わたしは先生が考えているくらい、ばかな学生ではありません。  
ん。

森田はこの不適格の理由を、クライについて

「あこの外れるぐらいは何の心配なことでもありません(ア)」「しばしば抜打ち検査をすることによって、不正を食い止めるぐらいの役には立つかもしれない(イ)」「荒馬を乗りこなすぐらい朝飯前だ(ウ)」

の例を挙げて(ア)ウの記号は筆者)、

軽視の気分があり、当然「ぐらい」しか使えない。逆に極度に高い程度や範囲を例示としてあげ、実質はそれに比べてそれほどでもないという場合には「ほど」の専用で、「ぐらい」が使えなくなる

と説明する(ホドについては49と他二例を挙げる)。48・49を見る限り説得的だが、ここでのクライの挙例は、(ア)はハと複合した主題のクライA、(イ)は名詞化のクライBが更にノによって連体節化したもの、(ウ)もクライAの主題用法、といったように、本稿が区別する別の用法であって、実は今問題にする「クライ+形容詞、状態性述語」の形で直接的に程度を表現したものではない。そして別項「例示による状態の程度」でこの形式を取り上げ、

50 安堵のために親しさが溢れ、呆れるぐらい落ち着いてしまっ  
た(「白痴」)

と他二例を挙げた上で、

ある動作や状態がどのようであるか、その程度を例示(動詞に付

く場合)や形容(形容詞に付く場合)によって表現する形式である。この形式の「ぐらい」は「ほど」や「ばかり」との置き換えがきく。

と説明する。とすればなぜ48・49が「注意した」「ばかな学生だ」の例示や形容となれないのかの理由は依然問われなければならないだろう。実際に、49のクライ版といった形で「高い程度を例示」する例は次のように可能な場合もあるのだ。

51 わたしはバチンコで卒業を棒に振るぐらいばかな学生でした。  
た。

この48・49の不適格の理由は、やはりクライの暫定抽出の性質なのではないかと考える。いずれも、「どのくらい注意したか/愚かであるか」については両者の間に共通の認識があるはずで、49は更に「先生」のその認識が容認できないという異議申し立てである以上、「どのくらい注意したか/愚かであるか」自体が厳しく問題とされている文脈である。そこを曖昧にする「暫定」では馴染まないのであって、逆に幅を持たせてなお抗議するような場合では

52 先生がどれほど/ぐらい私を愚かだと思っているかは知りませんが…。

の如くホド・クライの両方が用いられるはずである。

53 だいたいの費用としてこれぐらい必要です。

という例はまさに暫定抽出であると考えられる一方、このときの程度・量は最低とも最大とも言いがたい。

このように本稿は、ここで考えるDのクライに「最低限(乃至最大限)」という程度・量的制限は見いださず、クライC同様の単純暫定抽出なのではないかと考える。寧ろ問題としたいのは、これを



直接「程度・量」を表す用法と考えるべきか否かである。程度については、確かにクライが程度表現に与ると考えてよさそうな例がある。

54 太郎くらい賢い。

55 筆で書くくらい(に)難しい。

しかし量については、

56 山ほど食べた。

とホドで言える文をクライで言うことができない。

57 \*山くらい食べた。

ホドの場合は(本稿はクライの考察を目的として、その限りホドに言及するのみだが)、クライより直接的に程度・量を表すようである。そのためかえて結合する語が程度・量的意味を持つている必要がない。逆にクライが結合しやすいのは既に量の意味を持つ語である。

58 二日分くらい食べたな。／二時間くらい飲んだらどうか。

ということは、ここでクライが行っているのは結合語を量的な修飾成分にすることではない(それは「二分／二時間」が単独でも行えることである)。これと対照的に「山」は、それ自体は量についてニュートラルな語であって(当然ながら「\*山食べた」などとして量を表すことがない)、ホドとの結合によって量の表現として受け取られる道が開けると理解すべきである。これは名詞若しくは数量詞にホド・クライが結合した場合のことであるが、では句との結合の場合はどうであろうか。

59 死ぬほど食べた。／浴びるほど飲んだ。

が成り立つのに対してこれをクライで言うことはできない。

60 \*死ぬくらい食べた。／浴びるくらい飲んだ。

同じ趣旨のことを自然なクライ文で言うなら、例えば次のようであろう。

61 腹がはち切れるくらい食べた。／歩けなくなるくらい飲んだ。

60・61の可否が示すものは何か。「歩けなくなる」の他に許容されるのは、「びっくりする／記憶がなくなるくらい」等であるが、これらは(大量に)食べた／飲んだことに付随して起こり得る(と考えられる)コトガラであることに注目したい。言ってみれば、

62 (大量に)飲んで、歩けなくなった／記憶がなくなった／びっくりした。

という関係に立ち得るものたちである。一方「死ぬ」「浴びる」は、普通ここには入らない(注7)。

この「歩けなくなる／記憶がなくなる／びっくりする」クライというクライ節は、先に引用した森田が「ある動作や状態がどのようであるか、その程度を例示や形容」といい、日本語記述文法会(二〇〇八)が「事実を程度の例として取り上げる」というように、主節「飲んだ」の状況を説明しうる一、例なのだから、これも暫定的に抽出されたものであると考えるべきではないか(この場合は先の名詞・数量詞と結合したのと違い、単純暫定抽出の他、従属節として主節に関わる機能を句に付加していると考えられる)。

そして、これらを「程度・量」の用法と考えるべきかであるが、先に「クライが程度表現に与ると考えてよさそうな例がある」とは述べたものの、そもそも形容詞を修飾するものはまずは程度くらいなのであって、しかしそれが句と結合して複雑なクライ節となった場合まで程度表現であるかといえればそれはどうか。例えば次の63も大意は「とても不安になった」と同様に考えてよいかもしれないが、

一方でそれよりも「不安」の有り様を具体化することの方がこの表現の主眼であろうし、

63 けれども、このごろ、気味の悪い疑念が、ふいと起つて、誇張ではなく、夜も眠られぬくらいに不安になった。

【水仙・太宰治】

次の言い方などは程度・量と無関係であろう。

64 私たちが学生旅行をした時代には、日本の名山と言えば、殆んど火山に限られたように思われていた、富士山にさえ登り得らるれば、あとはみんな、それよりも低く、浅く、小さい山であるから、造作はないくらいに考えていた

【日本山岳景の特色・小島烏水】

64は助動詞ヨウダが「まるでこの世の終わりのように考えている」の形を取り得るのと同様に考えるべきで、いうなれば、このクライ（「クライニ」の形も取りうる）は、連用形<sup>レ</sup>なのである。述語が動詞でも形容詞でも、それを従属節が修飾すれば量・程度的解釈になることが自然多くなるが、クライの用法としては結果的に「量・程度」的表現になっただけという理解が妥当ではないかと思う。

更にこのクライが主節に立った場合を見よう。

65 とても礼儀正しく、誰にでも挨拶するくらいだ。

66 日中は梅の香も女の袖も、ほんのりと暖かく、襟巻ではちと逆上せるくらいだけれど、晩になると、柳の風に、黒髪がひやひやと身に染む頃。

【妖術・泉鏡花】

この主節クライダは従属節と並列されているのであり、内容上はやはり従属節の概括的なコトガラ（礼儀正しい／ほんのりと暖かい）を立証しまたは説明し得る具体的なコトガラの一つである。従属節

を持たない場合も同様で、

67 それでいて裁縫がへたではない。一度妻の縫ったものを着ると、他で縫わせたものはとても着られないくらいだ。

【わが妻の記・伊丹万作】

このクライダ文が何か（67の場合は妻の裁縫の技能）について説明する一例であることは言うまでもない。つまりクライDは次のようにまとめられると考えるのである。

状況を説明するにふさわしい一例としてコトガラを単純暫定抽出的に描写する

このようにクライDは、先のクライBと一見同形でありながら、その役割において両者は異なると考えるのであるが、それは文法的な相違にも及ぶ。まず先にクライDについて述べた「連用形<sup>レ</sup>であるが、クライBにはこれがない。

65 D とても礼儀正しく、誰にでも挨拶するくらいだ。

68 D 誰にでも挨拶するくらい（に）礼儀正しい。

69 B 近所とは疎遠で、せいぜい挨拶するくらいだ。

↓\*せいぜい挨拶するくらい（に）疎遠だ。

この点からも、Bについては名詞述語と考える前節の結論を繰り返すことになるが、更に主節の場合もBとDは対照的だ。

70 D\*（することは）誰にでも挨拶するくらいだ。

この主節「誰にでも挨拶するくらいだ」を、Bの如く「くらいのコト」と名詞述語と見ようとすれば、「他には長所がない」という存在抑制的な理解しかできず結局はBである。主節に立ったDは名詞と理

解することができない。つまり形は同じであっても、BとDはここでも文法上の違いを見せるのだ。Bがあくまで名詞述語を構成するのに対し、Dはあくまで情況描写の述語を構成するのであり、これはいわば終止形である。終止形も連用形も持つとすれば、それはさながら「静かだ」が両活用形を持つのと同じといえるのではないか。すなわちクライDは句を先述の単純暫定抽出の形容詞的描写文に変換する、一種の助動詞と考えられるのである。

なお、丸山直子(二〇〇一)は、次の例を挙げて

71 J R 北海道は「百万円でも安いくらい」と売り込みに自信満々だ。

「高い」ことを否定するために「安いくらい」と言う用法「Aを否定するために、対照的なB(対極にある極端なもの)を持つてきて、むしろBに近い、と言っている」と説くが、基本的に従いたい。その上でこれはクライDであるというのが本稿の立場である。即ち、「百万円でも安い」というコトガラは極端に見えて乱暴にとりあげられたものようでありながら、なお情況(売り込み商品の価値)を説明する一例として妥当だ、という表現のしかたであって、結局は如上のクライDの用法と異なるところはないのである。

#### 四 終わりに

以上のように、本稿はクライを次の四種に分類することとなった。

クライA 最低限の暫定抽出、副助詞、存在(+)  
クライB 最低限の暫定抽出、文末名詞化辞、存在(一)

クライC 単純暫定抽出、文中名詞化辞  
クライD 単純暫定抽出、助動詞

クライが最低限とは限らない、名詞化する用法もあるなど、既に指摘されていることを再び取り上げた部分も多いが、それらは互いに区別された用法にそれぞれ所屬させられるべき特徴であるというのが本稿の主旨である。先行論と異なる考え方をする理由は個々の箇所述べたつもりであるが、なお最後に、「程度と取り立て」の關係について直接的に考察した丹羽(一九九二)について言及したい。

丹羽は

72 軽井沢くらいで遊びたいね。

という例について、

「軽井沢ないしそれに相当するところ」ということで、共に当該事項の近傍を漠然と表す点で共通している。

と述べ、取り立てと程度の共通点を見いだす。72のクライをCの単純暫定抽出と考える本稿としても、「ないしそれに相当するところ」「近傍を漠然と表す」という把握には従い得るのだが、そこから「程度」へとつなげていくアプローチとは、立場を異にせざるを得ない。この説明は、

73 私は去年海外で論文を二本aばかり／bほど／c???くらい発表した。(中西一九九五)

のホドなどが、「二本」という実数に幅を持たせていう用法にこそふさわしいように思う。しかし実際のところ、中西が述べるように、「実際値が明確なのに、その断定をわざとぼかす婉曲的用法」は「クライは許容度が低い」。更に次のような違いを見せる場合がある。

74 私、昨日まで二日「\*くらい／ほど」休んでおりました…。  
 75 去年は風邪で二日「くらい／ほど」休んだこともあった。  
 本稿の立場から言えば、両者のクライの可否は、我がこととはいえ厳密なことを忘れて自然な時間が経過して暫定抽出として受け取られることが可能か否かに因るのであり、実数に幅を持たせ得るか否か、或いはその持たせ方が問題なのではない。さればこそホドの対応しない「軽井沢」のように、数値ならざるものもクライが対象とし得るのである。「近傍を漠然と表す」というのが「二日」と「三日」の関係のように連続した数値的な把握を前提とするならば、これはクライの性質とは言い難く、そこにホドなどの「程度・量」表現とは異なるクライの独自性があるのだと考える。

〔注〕

- 1 「くらい」「ぐらい」の両形があり、場合によっては片方が使いづら場合もあるが、本稿では両者を交替形と扱って特に区別せず、クライと表す。
- 2 丹羽哲也（一九九二）、丸山直子（二〇〇一）。
- 3 森田良行（一九八〇）が「最低限の例示」「軽視」、沼田善子（一九八六）が「最低限」、丹羽哲也（一九九二年）が「例示」「最低限の例示」、中西久美子（一九九五）が「低評価」の用語を用いて説明している。
- 4 「ノダ構造・状況の解釈としての用法」の例文に「猫一匹通れないと言うが」という文脈を施したのは後述の事情による。
- 5 33・34と、後の48・49は森田（一九八〇）の用例。但し傍線、圏点は筆者。

6 デモも「最低限」という制約がないという限りに於いて「単純暫定抽出」と考えるべきかもしれない。デモは名詞化辞ではないから33のクライを単純にデモに置き換えることはできないものの、「明日に」という連用成文に後置して「明日にでもテストがあるんじゃないか」とすれば、これは33に酷似する。その一方で34・35を「四〇からでも」／「新宿駅まででも」としたところでは成り立たず、「暫定抽出」をめぐるデモとクライの違いは更に考えるべきことがあるが、それについては稿を改めたい。

7 普通は入らないというだけで、文脈を整えれば次のように可能であるが、当然上述の論旨に収まる。「過酷な気候で冬は例年二人、三人死ぬくらい寒い。」↓「寒くて二人、三人死ぬ。」

〔参考文献〕

- 中西久美子（一九九五）「ナド・ナンカとクライ・グライ―低評価を表すとりたて助詞―」、「数量詞＋助詞「バカリ、ホド、クライ、モ、サエ、ト、ハ」―数量詞と共に用いられる助詞―」（『日本語記述文法会（二〇〇八）』現代日本語文法6 第11部複文）  
 本語類義表現の文法（上）『くろしお出版』  
 日本語記述文法会（二〇〇九）『現代日本語文法5 第9部とりたて 第10部主題』くろしお出版  
 丹羽哲也（一九九二）『副助詞における程度と取り立て』（『人文研究』第四四卷第一三分冊、大阪市立大学文学部）  
 沼田善子（一九八六）「第2章 とりたて詞」（『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社）

丸山直子(二〇〇二)「副助詞「くらい」「だけ」「ばかり」「まで」の、  
いわゆる「程度用法」と「とりたて用法」」(『日本文学』95、  
東京女子大学)

森田良行(一九八〇)「くくらい」(『基礎日本語2―意味と使い方』  
角川書店)

森山卓郎(一九九八)「例示の副助詞「でも」と文末制約」(『日本  
語科学』3、国書刊行会)

〔付記〕 本稿は、『ことのは―内田賢徳先生ご退休記念文集―』  
(二〇二二、私家版)に寄せた「副助詞クライの「最低限の例示」  
用法について」を、大幅に改稿したものである。

(ほしの よしゆき) 本学 文学部 日本語日本文学科

キーワード：クライ、暫定抽出、副助詞、とりたて